
僕と彼女の生存競争

涼月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女の生存競争

【Nコード】

N5198P

【作者名】

涼月

【あらすじ】

「僕」こと主人公は今年、一年下の後輩の子「楠木 麻衣」に告白された。

人生初の告白に僕は戸惑うが、OKしてしまった。

その日の帰り、麻衣は僕を夕食に誘う。

そこで彼女は、自分は進化、突然変異を扱う研究員という身分を語った後、「先輩

は突然変異を起こしていて、先輩が子孫を作ってしまうと、ヒトが

枝分かれして、現生人類の進化に影響を及ぼしかねないから私は先輩を殺さなければならぬ」と告げる。

彼女の手には銃が握られていた。

主人公が諦め半分で最後の言い訳をしたところ、彼女は受け入れてくれた。だが、その後に待っていたのは、彼女との監視目的の同居生活と様々なヒロインたちによる恋模様だった。

ヒロイン達との日常生活のなかで、突然変異を起こしてしまった主人公は、

自分のコンプレックスである突然変異とそれによって引き起こされる生存競争というキーワードに主人公は気づき始める。

主人公はそのしがらみの中で誰と交わるのだろうか？

第一話 彼女の告白（前書き）

初めての小説投稿です。下手ですが長続きさせたいと思っています。

第一話 彼女の告白

高校二年の秋、少し肌寒くなった廊下を僕は何時も通りに歩いていた。

「あの・・・」

ふと、僕は後ろから微かに聞こえた声に振り向いた。見ると僕の真後ろには一人の女子が立っている。彼女は小柄な体をしていて、その体のラインはともスマートで美術館で見るような彫刻のように美しく、それを少し茶色くて波立つ髪が彼女の凛として美しい顔を包んでいた。小柄な体からすると後輩の一年生だろう。

「僕に何か用？」

僕は彼女に優しく話しかける。

彼女は僕の言葉を聞いた後、僕の目をじっと見つめてから話し始めた。

「せ・・・先輩のことが好きなんです。ど、どうか私と付き合ってください！」

あまりに突然過ぎたので、僕はしばらく絶句した。僕は彼女と喋ったこともなければ、彼女の名前すら知らない。

「本当に一目ぼれなんです。付き合ってください」

彼女は戸惑う僕に押して頼んできた。彼女の顔はさらに下を向いて、茶色い髪ごしに彼女の頬が真っ赤になって、もうここからに逃げだしてしまいそうだ。僕に詮索している時間はない。

「僕で、よければ」

気の利いた返事じゃないって僕にも良く分かるような、とっさに出た言葉だった。

「あっ、ありがとうございます。私、1Eの楠木 麻衣っていいます」

彼女はそういつて紅く染まった顔を見せて廊下を走って行く、その姿はとても純潔で汚れていない、僕がこんな可愛い子と付き合っ

しまつていい物なのだろうか。

今日一日の授業を終えて、僕は教室を出る。楠木さんは寒い教室の外で待つていてくれた。

「待つてくれたんだ、ありがとう」

僕が彼女の頬はまた真っ赤になる。茶色の髪といい、小柄な体といい、なんて可愛いのだろう。

「先輩、今日はこれから予定ありますか？」

「いや、特に予定無いけど」

「もしよかったら、私の家で夕食とかどうですか？料理店やってるんですけど、今日、親がいなくて」

楠木さんのご両親は旅行なのだろうか、とすると、彼女は今日を狙つて僕に告白したのだろうか。

「いいよ、喜んで」

僕は笑顔で彼女の誘いを受けた。

雲がかってぼんやりとしている夕陽の下、街路樹の落ち葉をパリパリと踏みながら、二人で楠木さんの家に向かう。

「楠木さんは勉強は出来る方？」

僕は彼女に話しかけてみる。

「それなりに、努力してるんで大丈夫です」

「そっか」

話が長続きしない・・・でも彼女の家でまた話することが沢山出来るかも知れないと思い、僕は黙々と彼女とともに歩く。

彼女はそんな僕に自分から喋りかけてきた。

「先輩、私・・・先輩のこと好きですよ」

「どうして？」

「一目ぼれかも知れません」

「楠木さんの運命の赤い糸は僕につながっていたわけだ・・・こんな男だけどこれから宜しくね」

此処が楠木さんの店か、結構洋風な感じだ、ニス塗りしたテーブルが幾つも並んでいて、その奥に小さな厨房がある。

「先輩はそこで座って待っていて下さい。すぐ用意しますから」

彼女は小さな厨房で料理を始める。フライパンや鍋を小さな手で運んで材料を揃える彼女。こうしてみると、とても可愛い。でも、彼女が料理をする手つきは実に危なっかしい。

「なんか手伝おうか」

と僕は彼女に声を掛ける。

「いえ、大丈夫ですから」

彼女は笑って返事をした。

数分後、料理が運ばれてきた。ハンバーグとスープ。定番といえば定番だが、彼女が作ったそれは料亭で作るような本格的なもので茹でたニンジンやブロッコリーなども添えられていた。

「本格的だね、お金払わなくて大丈夫かな？」

「大丈夫ですよ」

「じゃあ、頂こうかな」

「召し上げれ」

彼女はにっこりと笑う。僕は何時も箸を使ってハンバーグを食べているため、お世辞にも器用とは言えないナイフとフォークを扱い始めた。

「先輩は、この所、体の調子が悪く無いですか」

料理が半分程僕の胃に落ちた頃、彼女は何の前触れもなく聞いてきた。

「確かに具合が悪いね4・5日前から」

彼女は長いため息をついた後、がっくりと肩を落とした。彼女の髪が振り子のように動く。

「そうですか、やっぱりそうだったんですね」

そうだ、彼女の言うとおり僕は四五日前から具合が悪かった。吐き気、下痢、頭痛、倦怠感。特に頭痛がひどい。それが一体何なのだろう？

彼女はおもむろに携帯を取り出して電話をする。

「もしもし、彼に間違いないです。ええ、計画通りやってしまいます」

彼女は数十秒間喋った後、携帯をため息と共に閉じる。

「楠木さん、なんか僕の事で、問題でも？」

彼女は無言で一枚の名刺を僕に差し出した。

進化・突然変異危機管理センター、助手 楠木 麻衣

「単刀直入にいいいますと、先輩は突然変異を起こしました。ただの突然変異なら何もませんが、

あなたの場合はあなたの子孫が我々現生人類の進化を大きく崩す可能性があります」

彼女の言っていることがよく分からないので、僕は結論を聞いてみる。

「えっと、それで楠木さんはなにがしたいの」
スプをすすりつつ喋る。

彼女は結構な時間、うつむいてから、すつ、と顔を上げて溜めていた言葉を吐き出す。

「ここであなたに死んでもらう事です」

「なんだって！？しょ・証拠は？！」

彼女は書類を一枚取り出して見せた。

「先輩の血液型、先輩のご両親の血液型です。これがすべて条件を満たしています。原因も言いたいですが、長くなりますから・・・」
というと、楠木さんは小柄な学生服から重たそうになにか取り出す。黒くて、鈍い光が見えた。銃だ。そんな馬鹿な、なにかの冗談だろう？

だが、そんな冗談にしては彼女の態度といい、言動といい、よく出来すぎている。

彼女が学生服からそつと出したと思った瞬間、銃をぐつと握り締めて僕の額に銃口をつけた。ひんやりとした金属の冷たさが、額に伝わってくる。これは、本物の銃だ、間違いない。

僕は生唾をのむ。

「先輩、最後に言うことはありますか？」

彼女は握り拳にピツタリ収まるようなとても小さな拳銃を持っている。訳が分からない。でもこのまま無抵抗で殺されるのは実に惜しい。よし、駄目元で最後のあがきをしよう。

僕はテレビでみたことを脚注を交えて話した。

「楠木さんは、進化つて分かるよね。」

「・・・知ってますよ。それが仕事なんで」

それぐらい知ってる、当たり前的事だと言わんばかりに彼女は呆れた顔をした。

このときも彼女は銃口を僕の額に当てたままだ。

僕の顔から冷や汗が垂れた。

「他の生物と共存したり、対立したりすることで個体数を一定に保つたりできないかな」

「つまり、あなたの子孫の存在が人類にとって有益になるといふことですか？」

「どこかの映画みたいに人を襲うわけでもないでしょ、僕の子孫は・

だから分からないと思うんだ、有益かそうでないかなんて、君に分かるはずないよ。もし計算して出した結果だとしても」

彼女は引き金に入っていた指をどかして拳銃にロツクをかけた。

「確かにそうですね・・・私が納得しなければどうしようもない・・・上の人に命令されてやったんです、確かに先輩の言い分は正しいと思います。御免なさい。私どう謝っていいか・・・」

「ああ、助かった・・・もう別に気にしてないよ、怖かったけどね」
まだ、生きている心地がしない。危なかった。なんとか乗り切ったようだ。

楠木さんはテーブルの上に置いてあった食事を片付け始めた。

「片付けなくても良いよ、毒とか入れてないでしょ」

無用心にそういつて、僕はテーブルに座り、彼女の料理を食べる。

僕の頭はぼんやりとしていながらも彼女の事を信じた。僕と楠木さんは本当に赤い糸で繋がっているのかも・・

「やっぱり優しいんですね、先輩って・・」

彼女は、僕が座る椅子の横でがつくりと肩を落としている。これで一段落つてところか。

だが、僕の心の中にはまだつつかえている部分が残っている。

突然変異っていったいなんのことだろう、なぜ僕がそんな目にあわなければならないんだ。そもそも原因はなんだろう、新種の公害か、被爆か、それとも生物に本来行われるべきであろう突然変異による進化なのだろうか？とにかく彼女は僕を見逃してくれたようだ。これからゆっくり探っていこう。

「先輩、私、本当に先輩のこと・・・」

「なんか言ったかい？」

第一話 彼女の告白（後書き）

この小説に対して、感想やアドバイスがあったらどんどん送って来て下さい。

第二話 原因・同居！？（前書き）

ちよつと長文です。今回は僕の突然変異の原因です
あまり、ストーリーには関わりませんが、頑張つて書いてみました。

第二話 原因・・・同居！？

楠木さんは僕の部屋に立っていて、僕に銃を向けている、僕の部屋で・・・

「昨日の続きかい？」僕は疲れているのか、そんな台詞しか口から出せない。

「なにいつてんの？」

彼女は笑みを浮かべてこういう。

「そろそろ、いい加減にして貰わないと・・・」

彼女の銃の引き金が・・・

パシンと音がした。パシン？って

そうしている内にすぐに二発目が来た。

「痛っ！」

そこでやっと目が覚めた。

そうか、さっきのは夢だったか・・・

目を開けると、新聞紙を持った活発な少女、いや、同い年の子が立っていた。

「おっ、由香か・・・おはよ」

由香は僕の幼なじみだ。家が近いから、小学生の頃から仲が良かった。

僕が遅刻しそうになると、たまにこうして無断で家に上がりこみ、叩き起こすのが彼女の日課である。

ちなみに身長は麻衣よりも下だ。

「昨日、後輩に告られたからって、考え込んで・・・」

「なんで知ってるんだよ、そんな事」

「学年女子の間ではすぐに噂が広まったからね、まあ、同じクラスだしこう何年もつき合っていると分かるのよ」

由香の話を聞きながら制服を着る。

「朝から低血圧だね、もしかして、振られたの？」

「なんで振られたことを前提に話すかな・・・」

「告られた事自体奇跡だし、2日も続かず終わるかなって」

「案外酷いこというな、お前」

そんなこんなで、今日は由香と登校する事になった。

「頭の具合はどうなの？」

やはり、由香も心配してくれていたのか。

「もう、平気だから」

彼女を心配させまいとついた嘘だった。何時になったら、この痛みは取れるのだろうか。

寝不足もあるが、今日はまた一段と酷い。

楠木さんに聞かないといけないな・・・

早速、昼休みに彼女の教室に行ってみる。廊下を歩いている時は、昨日の事もあってか、

周りからの視線がものすごく多いような気がした。

「楠木さんいるかな」

教室の前で女子を引き止めて呼んで貰った。

「麻衣く先輩呼んでるよ」

彼女はお弁当を広げて食べていた。

「ごめんね、食事中に」

「いえ、大丈夫ですから、なんですか」

「頭痛は何時、治るのかな？」

「ここだと、長く話せないんで他の場所で」

彼女は僕の手を握って、校舎裏まで連れていった。

「頭痛はじきに治ります。でも、心配なので、上に頼んで薬を作って貰うことにしました」

「あつ、そうなんだ。でも何で校舎裏に？」

「突然変異の原因と昨日、私があなたを殺そうとした理由を話して

おこうと思ひまして」

彼女は小声で話始める。

「じゃあ、此処はどこですか？」

「東京のはずれ」

「数週間前の事です、米軍の新型偵察機の塗装が剥けて日本の在日米軍基地に着陸したんです」

「その塗装が原因？」

「恐らくは・・・最初はうちの研究所のミミズから発見された異変で、大体が50、60代の人が発症してるんです。この学校の先生方の中にもこの症状を出している方がいます」

「でも、僕は十七だよ」

「稀な例です。ロシアで二人、ヨーロッパで五人、アメリカ西海岸で四人、中国はアメリカの偵察目標らしいんで百人程度が確認されています。これは資料から算出したものですが」

「全員殺したの？」

「中国にこの情報を流せば外交が悪くなります。他の国々は政府の命令で全員軍によって秘密裏に」

「で、なんで僕を見逃したの？」

「それは、先輩がもつともな理由を言うから・・・でも日本は政府が暗殺を拒否したから、研究所の命令で秘密裏にやろうとしたので、見逃す余地がまだあったんです」

「でも、なんで研究所にいるの？普通の学生なら・・・」

「父が重役の研究者なんで、その助手です」

「君のお父さんが僕を？」

「いえ、その上の人です」

「そっか、やっと分かったよ。じゃあ薬を飲んだら、晴れて自由の身だね」

「いえ、そこが問題だったんです。暗殺は免れたとしても、監視は続行されます。その条件の下日本は暗殺を拒否したんです」

「えっ、じゃあ、家の中にカメラとか付けたり、ストーカーとかさ

れるの？」

「はい、そうなると思います。ただそれだけでなく、あなたが結婚したりして、子供を持つとしましょう。それも監視対象に入ってしまう」

あまりに衝撃的なので僕は言葉を失った。まるでSFのような話だと思っていたが、僕の子供まで巻き込むとは。僕は落胆する。

「わかったよ。じゃあ、僕は教室に戻るね」

「先輩・・・」

楠木さんはまだ僕に伝えるべき事があるらしい。もう放って置いてくれ、構うな。

「まだ、なにかあるの」

「わ・・・私と同居・・・いえ、結婚してください！」

「えっ、それって・・・どういうこと」

「私を決められた婚約者だと思ってお願いします」

言われてみれば彼女は研究者だ、昨日のこともある。監視名目で済ませればそんなことも可能なだろう。だが、彼女に迷惑を掛けてはいけない。

「無理しないでいいよ、君には君の人生がある」

「無理なんかしてません、昨日の告白も、私が見逃したのも・・・先輩のことが好きだったから！」

振り返ると彼女は泣いていた。

それを待っていたかのようにチャイムが鳴る。僕も彼女も授業には出られそうもない。

ごめん、楠木さん。

第二話 原因・同居！？（後書き）

前書きで話した原因は、彼のような症状が、世界中で発生していて世界各地で同年代の子供が暗殺されているという、事を書きたかったので書きました。

楠木は彼を見逃しました。それは政治的な絡みも彼の言い分もあったのですが、

彼女が彼に好意をもっていたことが大きかったようです。

長いですが、読んでくださって本当にありがとうございます。まだまだ頑張つて、続けていきます。

感想や、アドバイスがあれば書いていつて頂けると幸いです。

第三話 校舎裏にて彼女と二人きり。僕は考えた（前書き）

今回はとても短いです。前回と比べると三分の一程度です。

理由はPC代わりに使っていたPS3が起動不能に陥ってしまったからです。

代わりにPSPを使いました。

短い物を小出しに出していますが、少しずつ読んでいてください。

今回は、楠木と主人公が校舎裏にて、二人きりになります。主人公はなにを思っているのでしょうか？

第三話 校舎裏にて彼女と二人きり。僕は考えた

昼間の校舎裏はどんよりと曇った空に似たアスファルトが敷かれていて、そこにある程度の湿り気と日陰が相まって、何だかスリルに満ち満ちた空気に包まれていた。

僕は数分無言で楠木さんの隣に座っていた。

それしか、僕には出来ることがなかった。

彼女とは殺す、殺される仲かな、とも考えていた。

でも、あの告白も、同居や結婚という言葉は彼女自身が「僕」に好意を抱いていた証拠なのだ。

僕もそれに答えたい、否、答えなければならぬ。

でも、どうやって？

同居・・・それくらいしか頭の中には浮かばなかった。

そもそも、僕は彼女を愛していないのかもしれない。

昨日、告白されて、殺されかけて、今日、また告白された。

「惚れるよりも慣れ」、「親しく付き合う中で愛が芽生える」僕の望む愛の形ってそういう物じゃないだろうか。

確かに彼女は可愛い、僕にはもったいないくらいに、でもお互いに未熟なのだ。

「楠木さん、僕は君が望むならば同居してもいい。でもイヤならすぐ追い出してくれ。あともう一つ、僕は君のことまだ余り知らない。だから君の本心に答える事はできない。だから、この機会に知りたいうって思う」

「先輩・・・」彼女は涙を流しつつ、そう呟いた。

第三話 校舎裏にて彼女と二人きり。僕は考えた（後書き）

主人公は今回、彼女を自分が本当に愛している事を再確認した後、自分は彼女の気持ちはどう受け止めるか考えました。結論は「彼女の本心を受け止めて同居して、彼女を知りたい」という物でした。

つまり彼は、彼女をまだ愛し切れないのです。

これから、由香やまだ出ていない登場人物との関わりで彼の心情はどう変わるのでしょうか。

良かったら、感想、ポイント、お気に入り登録などをしていって頂けると幸いです。

第四話 夕暮れ迫る中（前書き）

今回は非常に中途半端です。

しかも、文字数がきつちり固定されているので、
上手くまとめられませんでした。

PS3が帰ってきたら修繕したいと思っています。

第四話 夕暮れ迫る中

彼女は涙を拭ってから僕に礼を言つて校舎の外階段をパタパタと上つていった。

さて、授業をサボってしまったがどうするか・

先生方に愛の鞭を打たれ、疲労困憊した僕は、何時もより遅くまで学校にいた。

夕日は赤い光をテラテラと校舎に映している。

楠木さんももう帰つただろうか、僕はトボトボ歩く。

帰り道もあと半分というところで僕はある女子と出会つた。

僕と同じ学校の制服を着た彼女は髪を一つに纏めていてスカート丈も長く、いかにも真面目と分かる子だ。

だが、彼女は僕をみるなり、血相を変えて僕に走り迫つてくると彼女が持つていた学生鞆で僕の顔面を殴り 「よくも麻衣を泣かせたなあ！このダメ彼氏！」

と言ひ、一度でなく何度も殴つてきた。

彼女は僕が楠木さんを泣かしたと思つていらしい。

いわゆる仇討ちというやつだ。

すると、彼女の後ろからまた同じ制服の女子が走ってくる。

今度は少し赤茶けていて、髪にカールを掛けた、ちよつと上品な子が来た。

「真由、なにやってるの！？あつ、先輩。」

彼女は真由という子を止めに掛かる。

「邪魔しないでよ！このダメ彼氏！」

「済みません、先輩。私がなんとかしますから」

「真由、落ち着いて！これは麻衣の事情なんだから、首を出したら迷惑でしょ」

真由はやつと落ち着く、交渉の余地が見えてきた。

「ごめん、事情を話すよ。近くに公園があるからそこで話さない」

第四話　夕暮れ迫る中（後書き）

さて、今回の振り返りは・・

まず、殴られた！何度も何度も真由に殴られた。

彼女の言っていることから推定すると、麻衣と友達関係のようで、彼女が泣いている姿をみて主人公をボコボコにします。容姿から性格から考えて、なんか一直線って感じの子です。

あともう一人、名前はまだわからないですが、上品な髪をした同じ学校の生徒が止めに入ります。

彼女は真由と接点があるようですが、「先輩」といつているので麻衣とも関わっています。

残念ながら、そこで今回の話は終わってしまいます。

アドバイスや感想があったら是非送って下さい。

第五話 ベンチに座る三人（前書き）

今回もPSPで投稿です。

今回はところ変わって「立ち話もなんだから」と移動した公園からストーリーが始まります。

第五話 ベンチに座る三人

真由という子の動きも収まったので、ひとまず僕らは近くの公園のベンチに座ってから話し始める事にした。

最初に話し始めたのは上品な彼女からだった。

「私は、宮木^{みやぎ} 怜^{れい}と申します、そこに居る真由や楠木さんの友達です。じゃあ次は真由、自己紹介。」

「・・・深沢 真由」

真由はぶっきらぼうに自分の名前を呟いた。

彼女はすぐに次の言葉を呟く

「先輩は・・・どうして麻衣を泣かせたんですか」

宮木さんはすぐに彼女に反応して、「それは、さすがに失礼でしょう」といって彼女の不備を指摘した。

でも、私も少し聞きたいかな、と同調する。

僕は事摘んで、「楠木さんの気持ちに答えられなかったんだ」といった。

「もしかして、振ったんですか？」と深沢さんは聞く。

「そんなことないよ、彼女の気持ちに気づくことが出来なかったからなんだ」

「深いですね・・・、懂れます」宮木さんはそつと呟いた。

「先輩、私、勘違いしていたみたいです。ごめんなさい」

深沢さんは深々と謝った。

「別に気にしてないよ」

僕はあざだらけになった顔で笑顔を作った。

「先輩、もし、麻衣の事でなにか相談があったら話して下さい」彼女は最後にそう付け加えた。

第五話 ベンチに座る三人（後書き）

今回で麻衣と真由、怜の友人関係がハッキリしました。

主人公に突っかかってきた、真由も最後は相談に乗ると言ってきたし、怜も二人の仲を憧れると評価しました。

さて、これから彼女たちとはどのような絡みになるのか、期待です

第六話 怜の家に（前書き）

今回は、真由と別れて、令の家に向かいます。

P S Pにはこれが限界。

小出しに出していこうと思います。

第六話 怜の家に

「じゃあ、僕はこれで」

彼女と少ししゃべった後、僕は帰ることにした。

すると怜はすぐに「先輩、お怪我ひどいようなので、手当しないと」と言った。

確かに擦り傷やあざが少しあってジンジンと痛んでいた。

「じゃあ、お言葉に甘えて」僕はそういった。もしかすると、彼女に甘えたかったのかも知れない。

「でも、私が怪我させたんだし」真由は反論する。

「大丈夫、それに私の家近いから」

彼女は名残惜しそうな顔をしたが、

「分かった。じゃあ、先輩、お大事に」

といって、怜に仕事をまかせた。

彼女の家は本当に近かった。ざっと見積もって、100メートル位だ。

しかも、彼女の家は少し値打ちの高そうな、洋風な建物だった。

「さっ、あがって下さい」

「お邪魔します」

彼女はスタスタと家の中を歩く、立ち姿も綺麗だ。

家の感じもそうだが、こういうのをブルジョアって言うのかな？

でも、こう見ると、真由とは全く違うオーラが彼女にはながれているような気がする。

おしとやかで清楚だ。でも、何故、怜と真由は友達になったのだろう？

「一つ、聞いてもいい？」

「なんですか、先輩」

「どうして、深谷さんと友達に？ 雰囲気結構違っただけだ」

彼女は自分の部屋について絨毯の上に座る。

第六話 怜の家に（後書き）

今回のおさらいは、

真由と怜の性格の違いです。

真面目で、一直線な真由、上品な怜。

何故、二人は友達になったのでしょうか。

第七話 真っ直ぐな彼女（前書き）

今回は性格が違ふ真由と怜が何故、友人になつたかを怜が語ります。

第七話 真っ直ぐな彼女

宮木さんはそつと口を開き始める。

「それは、真由と私が似てないからこそなんです。私は、親の影響もありますが、外見ばかりを気にしていて、誰からも変に思われぬように行動してきました。最初はそれでいいと考えていたんです。だって、その方が端然楽でしょう?」

真由は自室に置いてあったティッシュに消毒液を含ませ始めた。

「でも、真由は違った。可哀想なくらい、真っ直ぐで他人に汚されないありのままの自分を学校でもプライベートでも表現していた」僕はふう、とため息をつく。きつと自分にも心当たりがあるからだろう。

ただ、それがなんだかはハッキリしない。目の前にそれがあるのにピントが合わないだから見えてこない。

彼女はまた話し始めた。

「最初は片思いからなんです。ああ、あんな人になれたらなってもいつの間にか話すようになって友達になれたような気がします」
「そうだったのか・・・」

彼女はティッシュを僕の頬につける。

結構しみる、きつと彼女が真っ直ぐだからだろう

「ところで、麻衣さんはクラスでどんな感じ?」

「麻衣さんはいつも大人しいけど、優しくて、私たちに勉強を教えてくれたりするんです」

彼女は笑顔で話していた。

でも誰も知らないだろう。麻衣が僕を殺そうとしたこと。僕の為に泣いたことを・・・

「でも、麻衣に彼氏が出来るなんて・・・なんか先を越されちゃったような気がします」

彼女はうつとりとした目を輝かせながら話す。

「幸せって良いですね、麻衣さんを幸せにしてあげて下さいね」
果たして僕が、彼女を幸せにすることは出来るのだろうか。

「幸せにしてみせるよ、きっと。だって麻衣さん可愛いから」

一抹の不安を抱えつつ、彼女に一通りの手当てをしてもらって僕は
家路についた。

第七話 真っ直ぐな彼女（後書き）

さて、今回は真由と怜の関係でした。

怜は真っ直ぐな彼女に自分と違う何かを感じ、友達になったようです。

主人公は麻衣についても聞きますが、自分の体験の方が現実感があったようです。

第八話 頑固な父（前書き）

今回、同居の許可をもらうため主人公は父と真っ向からぶつかります。

父は彼になんというのかに期待です。

第八話 頑固な父

家に帰る。もう日も暮れた後、急に雨が降り出してきた。

僕はびしょ濡れになりつつも、固い決心で父に「同居」について話さなければならかった。

頑固者の父はそれを許してくれるだろうか？

この家は僕と父と祖母、祖父の三人暮らし。

母は僕がものごころ付かぬ頃に亡くなった。

早速、居間にいる父と面と向かう。

「お、お前、どうしたその顔は！まさか、高一でタイマン勝負がよくやった！負けたか、勝ったか？」

女子にやられました、とは流石に言えないので、勝ったよ、と言っておく。

「どうしても話したい事があるんだ」

父は息子の勝利を喜びながら答えた。（嘘だけど）

「なんだ？」

「今日、彼女が出来た。どうしてもその子と同居がしたい」

父は少し沈黙してから、「そうか、お前も大人になったもんだ」すつ、と父の顔が険しくなる。

「許してくれるか、父さん！」

「ただしな世の中そんな、甘くないんだ、お前の彼女の飯はお前が稼げ。バイトでもなんでもいい。汗水たらして女を養うそれが男だ。学費は俺がなんとかする」

もうここまできると引き下がれない、意地でもやるしかない。やろうじゃないか！

「分った、僕は行くよ、ありがとう」

「じゃあ、これ持って行け」

父は嬉しそうな顔を見ると、黄色くなった一枚の紙を出した。

「俺が高校出て、お前の母さんをお世話するために出していた、履歴書

の余りだ」

昔の父と母を連想してなんだか、胸が熱くなってきた。

「母さんはその頃可愛くてな、俺も職を選ばず働いたもんだ」

うつすらだが幼少に見た母さんの顔を思い出す、肌は純白で髪は長くとても綺麗だったような気がする。

それを麻衣の姿に重ねつつ、僕は学生鞆に生活用品と履歴書を持ち、夜中、雨の中、家を出た。

彼女の家に着く、制服はびしょ濡れで持ってきた生活用品も濡れていた。

「先輩！こんな時間にどうして!？」

「ごめん、親と話してたら熱くなっちゃって。で、でも同居できるよ」

「とにかく、入って下さい！」

あれ？怒られたかな・・・

第八話 頑固な父（後書き）

今回、主人公は物心つく前に失った母に対する。父の熱心な態度に関心して、

家を飛び出しました。彼は今後どのような努力をするのでしょうか。

感想やアドバイスがあれば送って来て下さい。

第九話 彼女の家（前書き）

前回、家を出て、楠木家に飛び込んできた主人公、
今回は彼女の家を一通り見回して、バイトの件も話します。

第九話 彼女の家

「じゃあ、どうぞ」

楠木さんは僕を部屋に通して、部屋を案内する。

「ごめんね、こんな夜遅くに、親にいわれていてもたっても居られなくて」

今から考えると、夜中に傘も差さずに家を出たのはバカだったな、と後悔している。

「私、ここで一人暮らしなんで、別に迷惑してませんけど・・・じゃ、この部屋で良いですか？」

僕は、厨房のすぐ後ろにあった小さな部屋に案内された。

「いいの？こんな良い部屋使っちゃって？」

「私はリビングを使ってますから」

楠木さんは僕が持ってきた生活用品を見た後、手伝います、と言っ

部屋にその品々を置き始めた。

「一人暮らし、つらくない？」

「中学生の時は辛い時もありましたけど、私には勉強がありますから」

「勉強熱心なんだね」

「でも、先輩だって、私を説得出来たじゃないですか」彼女は少し悲しい顔をして続けた。

「勉強なんてものは、世の中では三分の一くらいしか役に立ちません。重要なのは蓄えた知識をどう使っていくかです」

確かにそうだ、そうでないと自己満足で留まってしまふ。

「だって人間ってそんなに完璧じゃあないだろう、役立たずでもいいじゃないか」

「よし、これで最後」

最後の荷物を置いて、リビングに向かう。

リビングは結構広かったが、本や資料、パソコンのCDやフロップィーで埋まっていた。

床はフローリングで、カーペットが敷かれていた。

「さすが研究者だね」

「ほとんど父のです。今はあの事件で、海外に出かけて研究していますが、いつでも作業出来る様にそのまま置いてます」

「そういえば、なんでここがレストランになっているの?」

「ここは、元々、母がこの店を経営してましたから」

へえ、と思いながら部屋を見回す。すると、白くて丸いものが服の上に乗っかっていた。

「人骨じゃん!」

「レプリカですよ、レプリカ」

彼女は笑う、結構びっくりした。

もう、研究者の部屋と言うべきなのか、魔女の部屋なのか分からなくなってきた。

彼女は厨房でコーヒーと、軽食のサンドウィッチを作って持ってきてくれた。

「ありがとう」

暖かいコーヒーを啜りながら、ゆっくりと今日、父と話した出来事を話す。

「それで、バイトしなくちゃならないんだ」

「先輩のお父さんも頑固ですね。じゃあ、私何か、紹介しましよるか?同級生でバイトやっている子、多いし」

僕は、同級生という言葉に引っかった。

「そういえば、真由って子と、怜って子に会ったよ」

「そうですか、でもなんで?」

君の事で殴られたとは、言い出せないの、僕が君の彼氏だって知っていたから。と言う。

「真由は図書館のバイトやってますけど、どうですか?」

「えっ、そんな柄じゃなかったよ、もっところ活発な」

「静かで、本とか運んだりする力仕事、好みらしいので、それもいいな、と思いつつコーヒーをまた啜る。

飲食店でせかせか働くのよりは楽そうだし、力仕事にはある程度自信がある。

「じゃあ、明日真由と話すから、休み時間、図書室集合って言っていて」

「わかりました、じゃあ、私はお風呂に入ってくるんで」

あとは、彼女の次にお風呂に入って寝るだけだ。

この同居生活、上手くいきそうだ。

第九話 彼女の家（後書き）

今回、主人公は真由がやっているバイトに興味を持って、積極的にバイトをやるうか考えました。

感想、アドバイス等があれば、送ってきてください。

第十話 生存競争（前書き）

今回は題名である、生存競争に主人公が気づいていきます。

第十話 生存競争

僕は楠木さんが入ったお風呂に入る。

お風呂の中には、彼女の甘い匂いが漂っていた。

よく考えてみれば、昨日と今日で僕と彼女の仲はとても良くなったような気がする。

それは、彼女がこの告白のもっと前から僕に好意を持ち続けていた為だろうか、

それとも、殺し、殺されかけた仲だからだろうか。

そういえば、彼女の出た後のバスタオル姿はとても良かった。

顔がほんのり赤く染まっっていて、純白ではないが健康的な肌が見えていた。

楠木さんは、研究者って感じがしない気もする。

普通、研究者ってのは、汚い部屋で、コンビ二の弁当を漁り、牛乳を飲み、いかにも不健康な

生活をしていそうだ、でも彼女にはそういうのが感じられなかった。普通の十六の学生って感じだ、今を生きてるって感じがする。

彼女が研究していることは進化だ、考えてみれば、今を生きていて当然だ。

今を生きて、変わり行く自分の周りの環境に柔軟に対応し、時代に淘汰されぬよう生存する。

それが進化だ。

僕もこの状況をありのままに受け入れて行動しよう。

僕のような人は少ない、そして淘汰されやすい存在だ。

彼女がいて、僕がいる。それが、今の状況だ。

そして、その中で生きのこっていく。

それこそが「生存競争」なのだ。

二人で生き残ろうと思った。

第十話 生存競争（後書き）

今回、主人公は「生存競争」に気づいて、時代や環境に淘汰されぬよう

彼女と二人で生きていくことを決心しました。

淘汰とは彼の死をさします。

彼のような、突然変異者はとても少ないため、現生人類との競争の間で、

滅びていってしまうのです。

それを、彼は彼女と一緒に乗り越えていこうと決意します。

良かったら感想なども書いていって頂けるとありがたいです。

第十一話 麻衣の為に稼ぐ（前書き）

主人公は前回した麻衣との会話どおり、図書室にて、真由と落ち合います。

第十一話 麻衣の為に稼ぐ

僕は昨日の打ち合わせ通りに真由と図書室にて会った。

「こんにちは、先輩。」

「こんにちは」僕は軽く会釈する。

「麻衣から聞きましたよ、バイトの事。先輩も以外とカッコいいですね、同居している彼女の為に稼ぐなんて」

「そう言われると、俄然やる気が出るよ、で求人あるの？」

「特に募集はしてないらしいんですけど、やる気さえあれば、良いって言っていましたよ」

助かった、これで何とか親父の条件はクリアした。

「じゃあ、今日、早速行ってみてきてもいい？」

「大丈夫ですよ」

「ありがとう、ホント助かった。ジュースでも奢るよ」

彼女は嬉しそうな顔をして僕に付いていく。

「コトン」

自動販売機から出たジュースを渡して外階段をゆっくり上る。

「彼女との夜はどうでしたか？」

ぶつ、と持っていた紙パックから吹いてしまった。

「君って、真面目そうに見えてそうじゃないんだね。まさか、いつも猫かぶってる？」

「全然そんなこと無いですよ、いつもからこんな感じですよ」真由は笑う。

「で、昨夜はどんなことしたんですか？」

「別に何もやってないよ」僕もなんだか笑えてきた。

でも、彼女は僕が何かして喜ぶだろうか、否、よろこぶ訳がない。

「君だったら、なにかしてくれる？」

「えっ、先輩にですか？」

「そう」

「えっと・・・」彼女は言葉に詰まる。

「なにも出来ないだろ？」

「で、でも先輩なら」

彼女が言わんとする事を制止して、僕は話す。

「そばに居るだけで良いと思うんだ、付き合ってまだ二日だし」

真由はすこし考えた後、笑顔になってこう言った。

「じゃあ、私、先輩のこと応援しますね。あと、麻衣を飽きさせないでくださいね」

一週間後、採用も決まり、僕は本格的に近くの図書館でのアルバイトを始めた。

飲食店よりは楽だと思ったが、結構きつく、本の貸し出しから、整理、掃除などなど、やることは沢山あるのにも関わらず、休憩時間もほとんど無い。

作業、初めて数十分、僕はすこしへばって来た。

「思ったよりもきついね、この仕事」

「手が動いてませんよ、先輩」

「はい」

整理中の本の題名を見る。「淘汰・・・」

そういえば、生物のコーナーを整理しているんだった。

えっと・・・

生物は皆、平等でなく、生存と繁殖の差があるのではないかと考えた・・・

生物は同じ種に属していたとしても、様々な変異が見られる。

変異の中には自身の生存確率や、次世代に残せる・・・

その、雄と雌の交配がよければ、強い品種になることもある。

弱ければ、生存競争と呼ばれる、自然に淘汰され消えていく

つまり、同じ生物内で、篩い分けの役割をするものである。

これは、現代、薬剤耐性菌などに見られる変化と同じものがあります・・・

斜め読みだがなんとなく分かってきた。

「うわっ、」

視線を前に戻すと真由は本を本棚に戻していた。本を取り上げられたようだ。

「懲りないですね、先輩。」

「すみません・・・」

四時間働いて、3600円。こんなので、生活持つかな？

疲れ切って家に帰る「ただいま」

「お疲れ様、どうだった？」

彼女は制服にエプロンをして玄関で迎えてくれた。なんか、夫婦みたいだ。

「ぼちぼちかな」

「夕食できてるから、食べよ」

「そうだね」

「仕事、やっぱり疲れる？」

「うん、でもやりがいが出てきたし、麻衣の為なら頑張れるよ」

そうだ、僕は彼女のために働いている、弱音など吐かずに頑張らねばならない。

もっと稼がなければ・・・

「そうなんだ」

彼女は少しためてから、こう言う。

「明日、休日だけど空いてるよね」

「大丈夫だけど何？」

まさか、デートだろうか、僕は少し期待する。

「ちょっと仕事なんだ、付いて来て欲しくて」

少し落胆したが、彼女も忙しいのだと思う。しょうがない事だ。

それに、僕でよければ彼女の役に立ちたいとも思う。

第十一話 麻衣の為に稼ぐ（後書き）

今回は、真由からの承諾を受けて、今日すぐに行くと言
っていました。昨日の考えもあるのでしよう。

でも、それとは裏腹に真由は麻衣との同居生活に興味があるよう
です。

主人公はその後、図書館アルバイトを始めるようになりますが、
仕事があった以上にきつくなってきます。

その仕事中、彼は気になる本をみつけて、チラッと読みます。内
容は自然淘汰について書かれているものでした。

主人公は斜め読みをしますが、それが新たな出会いに繋がって
いきます。

その帰り、彼は家で麻衣に弱音を吐いてしまいます。

彼女は優しくしてくれますが、これではだめだと、自分の体に鞭
打って働くことを決意します。

あと、ポイントや、感想、お気に入り登録してくれている方、本
当にありがとうございます。

これからも続けていきますので、応援宜しくお願いします。

第十二話 自然淘汰（前書き）

今回、彼女の仕事でストーリーが大きく動きます。

第十二話 自然淘汰

僕は、麻衣が昨日言っていた仕事に付き合う事にした。

「仕事って、どんな仕事なの」

「私の中学時代の先輩に会って色々話すだけなんだけど」

「それと仕事と何の関係が？」

彼女の顔が一瞬曇る。

「あの日の事、まだ覚えてる？突然変異のこと」

「ハッキリと覚えてるよ」

僕が殺されかけた日、僕に彼女ができた日・・・色々な事柄がそこに詰まっている。

その日からというものの、この不幸な呪縛から抜け出せないでいるが、逆に麻衣や怜、真由に出会うことが出来た。しかも、今はアルバイトまでしている。

まとめてみると僕の人生が180度変わった日だ。

「実はもう一人、殺さなければならぬ人がいたの」

「えっ、それってどういうこと？」

「つまり、あなたの他にもう一人突然変異者が居るって事」

そうか、突然変異者は日本に僕一人ってわけじゃないのか

「それが、中学校時代の君の先輩だったんだ」

「殺そうとしたのは、あの日の前日」

「えっ、で、どうして止めたの？」

「罪悪感というか、上手く銃が握れなかった。それで、思いっきり銃を取り上げられて、分解された」

「ぶっ、分解って・・・」

「彼女、強いから・・・確か、親が自衛隊らしくて」

「おい、ま、まさか僕をボディガードに使う気!？」

「そう」

「無茶いうな、帰る!」

「彼女、物分りはいい方だから大丈夫。事前に連絡したし」

家から電車で一駅行った所に彼女の家はあった。

こんな閑静な住宅街でそんなことがあったのだろうか、とても信じられない。

ピンポンとインターフォンを押して、彼女が出てくるのを待つ。

彼女の先輩、どんな人なのだろう。

「出てこないね・・・」

「変な人だからね、自衛隊の親がいて武術ができるって言うのに、趣味はパソコンだから」

「じゃあ入ろうか・・・」

まるで、お化け屋敷にでも入るみたいだ。僕は生唾を飲む。

入ると、そこはとても暗く、湿りきっていて、フローリングの床から響く、麻衣と僕の足音が家に響いていた。

リビングに向かっていると、「かちかち」とパソコンの操作音がした。

「またパソコンやってるのかな」麻衣は静かにつぶやく。

おじゃましまーすと言ってリビングから彼女の部屋をあける。

入ると、薄暗い部屋に長い黒髪の少女が座っていた。彼女の前にはパソコンが白く光っていて彼女の髪を照らしていた。

「もしもーし」麻衣は彼女に呼びかけた。

「うっ、だ、誰っ？」

僕は暗い部屋に電気をつける。

彼女は振り返る、あつ、綺麗な人だ。

本当に肌が純白で、その上に掛かる長い髪は深く吸い込まれそうな黒だった。

「麻衣・・・」

麻衣と彼女の表情が曇った、前の因縁からだろうか。

「弥生先輩・・・」

弥生という子は麻衣はしばらく見てから、僕に視線を向ける。

「へえ、これが麻衣の彼氏か・・・始めまして。麻衣の先輩の九条

弥生です」

九条さんは、黒い髪を揺らして少し微笑んだ。
「どうも」

「麻衣、ちょっと席外してくれないかな」

彼女はすこし、睨み付けるように麻衣をみる。

こういうのが、先輩と後輩の仲なのだろうか。否そうじゃない、きっと、麻衣を信じていないのだ。

「はい」

麻衣は名残惜しそうに、僕と九条さんを見た。

麻衣が出た後、九条さんはゆっくりと微笑みかける。

「どうだった？」

彼女は僕に突然聞いてきた。

「なにがですか？」

「あつ、ごめんなさい。焦ってて・・・あなたも麻衣に殺されかけたでしょ、その時、どう思った？」

「最初は信じられませんでしたけど、親の血液型と銃を見せられた時は本当に驚きましたね」

彼女は少し目線を逸らし、話し始める。

「私も凄く驚いた。私ね、中学の頃は剣道部やってたんだけど、麻衣は後輩の中でも気に入っていた、いや、親友だったって言うても良かった。その子に銃を向けられるなんてね」

「麻衣が言うには、銃を分解したとか・・・」

「あつ、これのこと？」

彼女は引き出しからなにかを出す。

「これ・・・」

九条さんの白い手のなかに分解された銃があった。

「いったいどうやって分解したんですか？」

彼女はすこし笑う、

「映画で覚えたの、ちょっと見せて」

本物の銃はエアガンのように、ドライバーを使わずにまるでパズルのように組みあげていく。

まるで、ルービックキューブを組み立てるような速さだ。カチャッと彼女は銃をコッキングする。

そして、その銃口を僕に向ける。

「すごいよ、映画並だ」

彼女は少し真面目な表情になる。

「動かないで、そのままじっとしてて」

「えっ、冗談でしょ」

ガタンとドアの空く音がして、そこから麻衣が飛び出してきた。

彼女はいままで僕に見せたことの無い驚きの表情をする。

「自然淘汰って君は知っているかな」

僕は即座に図書館で見た本を思い出す。

「知ってますよ」

「生物には同じ種類でも性質がことなる、その中には繁殖や生存にすぐれたものがいるそれが子孫を産み弱い個体を滅ぼす」

僕には九条さんがなにを言いたいのかさっぱり分からない。

そう考えている内に彼女は本題を言い始めた。

「私と付き合って、そして私にあなたの子を産ませて、それが自然なことだから」

「そっ、そんなこと言われても」

彼女の言いたいことはなんとなく分かる気がする、イレギュラー同士で後世に強い子孫を残したいのだ。

確かに彼女の言うことは間違いではない、むしろ正しい。

これも、ひとつの恋の形なのかもしれない。

第十二話 自然淘汰（後書き）

主人公は今回、麻衣か弥生どちらかを選択しなければならなくなりました。

自然淘汰の流れでは、弥生を選択したほうが自然だし、そっちの方が麻衣にとっても自分のようなイレギュラーな存在を忘れられて幸せかもしれません。

でも、麻衣が自分を愛してくれているということも知っています。ですが、主人公はまだ彼女を愛しきれていないかもしれません。

感想やアドバイスがあれば送ってきていただけると助かります。

第十三話 恋敵の一匹狼

弥生さんがこんな人だと僕は思っていなかった。

彼女と僕は同じ事情だ。だからもう少し二人きりで話していたい。僕は麻衣に視線を向けて

「麻衣、この部屋を出ていってくれないか」と言った。

麻衣は「嫌、いやだよ」と言いつた。彼女の目からは涙が流れている。

「僕と彼女は同じ事情なんだ。もう少し話したいんだ」

「だから、嫌なの。あなたが先輩に取られそうな気がして。それが自然の摂理だつていわれたら逆らえないじゃないですか」

「とにかく出ていってくれ」

僕は半分自棄になつていう。

彼女はゆっくりとドアを閉めた。

麻衣が出ていった後、弥生は銃を握ったまま、ありがとうと言った。

「僕に告白しているのに、銃を持っているのはおかしいよ」

彼女は少し微笑んで、そうね、と呟いた。

「その銃を分解して僕に渡して」

弥生は分解を始める。分解も組立と同じ大体同じ時間で終わる。

分解したあと、彼女はホツとため息をつく。

「じゃあ、もう一度言うね、彼女と別れて私と付き合っただけが、自然なの」

「自然か・・・キミも僕も自然に振り回されてここまで来てるよね」「なにが言いたいのか？」

「僕と麻衣は自然に振り回されていない。好きだと思っただけで付き合ってるって。彼女はそうだったんだ」

僕はすこし溜めてから、「君は僕の事、好き？」と聞く。

彼女も少し考える、しばらくしてから「考えておく」といって、僕も「それがいいよ」と彼女に諭した。

「好きになつたら、必ず伝えにいく・・・」

「わかった、待つてるよ」

僕は自然に振り回されていらないと言ってしまったが、これが自然なのかも知れない。

強いから、頭が良いから、美しいから・・・人々には様々な利点がある。

だが、それを後世に伝えるためだけでは、人間にはとても不十分だ。だからこそ人々は人を好きになるというスパイスのようなものを手に入れたのではないかと僕はそう思う。

それこそが、人間という生き物にとって自然なのだ。

銃を引き出しにしようと、弥生は少し下を向いて喋り始める。

「麻衣とは、どうなの？」

「まだ、キスさえ出来てませんし、手を繋ぐ事さえしてません」

「飽きたりしない？」

「いや、僕がいけないんだと思っています」

「積極的じゃないんだ」

彼女は少し笑みを浮かべて喋る。

「それとも、まだ彼女のこと信じられない？」

「それは、多分無いです。同居してますから・・・」

どう同居！？と彼女は驚く。

「監視名目ですが・・・」

「そっか、それだけ麻衣のことを信じられるんだ・・・」

彼女はまた、下を向く。

「私ね、ずっと一人だった。子供の頃からずっと。親の影響もあつて、自分を磨こうとして努力してたから、だから中学の時は一匹狼で部活の新生に全く慕われなかったの、同じ学年の人に後輩がどんどん集まっていくなに私には誰も来ない。でも、麻衣は一人で私のところに来てくれた」

「麻衣がそんなことを」

「私も馬鹿だから、彼女を鬱陶しく思っただけ振り払おうと何度もきつい事やらせているのに、涙を拭って私に教えて、って頼むんだ・・・」

彼女の目から、涙がポロリと落ちる。

「それって、きっと彼女が私を信じていたからだろうと思う。だから私、麻衣のこと信じてみようと思う」

そういった後、彼女の涙は夕立の始まりのようにポロポロと落ちていった。

「大丈夫ですよ、麻衣なら、きっと許してくれますよ」

僕はそういつて、ハンカチとティッシュを手渡す。

もしかしたら、この日の出来事は麻衣が彼女を裏切ったことによる、彼女の強がりな性格の暴走、

いや、彼女の中の狼が暴れたのかもしれない。

突然変異という、重い現実を背負い、さらに麻衣から裏切られたことへの絶望。

彼女は本当に一匹狼のような存在になって、最後に麻衣の彼氏である僕に目をつけたのだ。

僕が彼女と同じ立場なら、僕もそうしていたかもしれない。

第十三話 恋敵の一匹狼（後書き）

プロローグや、第一話を改稿しました。
感想、アドバイスがあれば、送ってきてください。

第十四話 「ファーストキス」 (前書き)

弥生という恋敵が現れ、さらに主人公と麻衣の関係は進展していきます。

第十四話 「ファーストキス」

その後、麻衣と弥生は僕を部屋から追い出して話し合い、二人とも仲直りが出来たようだ。

彼女たちが話を終えた頃には日はすっかり落ちていた。

「じゃあ、二人とも此処に泊まっていけない？」

弥生は提案する。

「えっ、先輩いいんですか？」

麻衣は嬉しそうに聞いた。

「弥生先輩とお泊まりなんて、合宿以来ですね」

勝手に話が進行しているが、泊めて貰えるならとても楽だ。

「先輩、いいですね」

麻衣は僕に聞く。

「僕なら、別に良いよ」

「そんな敷けた事、言わないで下さい！折角なんだから楽しみましようよ」

やれやれと僕は重い腰を上げる。

「じゃあ、麻衣と私は料理をキミはお風呂掃除」

弥生さんの分担で、共同作業が始まった。

といつても僕は風呂掃除担当だが。

風呂の掃除もやつと終わり、僕は彼女たちと食事を取った。

「美味しい」と麻衣は呟く。

「よかった、久しぶりに作るから大丈夫かなって思ってたんだ」

「弥生さんは何時も何を食べているんですか」

僕は聞く、

「コンビニで買ったたり簡単なものを作って済ましてるよ。部活で忙しいから」

今度は麻衣が聞いた。

「先輩まだ部活やってるんですか」

「今度は弓道部だけだね」

そんな話を交えつつ、僕らは夕食を取った。

夕食をとった後は食休みで、みんなテレビを見たりしていた。

「じゃあ、お風呂どうする？」弥生は聞く。

「先輩が先で、私たちは後から入りますから」麻衣が言った。

「じゃあ、先入ってくるね」弥生はそういつと、お風呂へ行ってしまった。

部屋には、麻衣と僕だけが残っていた。

急にテレビの雑音が消えて、麻衣は僕に話しかける。

「先輩、今日は付き合ってくれてありがとうございます」

「いいよ、別に。楽しかったし」

「私、弥生先輩に怒られちゃいました。先輩を退屈させちゃダメだつて・・・」

「確か、彼女、僕にも聞いてきてたよ、そのこと・・・」

一瞬、二人は黙り込む。

この部屋が少し、甘い緊張に包まれる。

その中で、彼女は僕に近づいてきて、僕の唇を奪った。

十秒にも、五秒にもみたくないファーストキスだった。僕はなぜか戸惑いもせず、

彼女がその唇を離してくれるのを待っていた。

暖かな彼女の体温を感じながら。

彼女があの日、銃を僕の額に当てた時のあの冷たさを暖めるかのように、

その過去を清算していくかのように彼女の唇は動いた。

もしも、今、麻衣があ那时的ように、銃で僕を殺そうとしたとしても、僕はずっとこのままだろう。

彼女の温かみから、もう僕は逃れられないのだから。

第十四話 「ファーストキス」 (後書き)

麻衣とのファーストキスに成功した主人公。

弥生は今後、麻衣と主人公の関係にどう関わってくるのでしょうか。

第十五話 拭う（前書き）

少しの間、編集などで次話投稿休んでいましたが、再開したいと思います。

今回のタイトル通り、ブランクを拭えるよう頑張ってます。

第十五話 拭う

弥生さんがお風呂から上がった後、僕らは二人でお風呂に入ることとなった。

弥生さんの言葉を聞いてから、麻衣は少しづつ、僕との距離を縮めようとしている。

つまり、恋愛している。でも、その先に待つものは何なのだろう。

男女は自分の遺伝子をより優勢な個体に残そうと動く。それが生物にとって決められたプログラムなのだから。でも僕らが子供を作ってしまうと、人類が進化の枝分かれを始める。

枝分かれというのは、猿と人間が木、大地と方向性を分けて進化していくことだ。

こんな事を背負って僕らは恋愛をしている。

「ひとつ、聞いても良いかな」

麻衣は急に喋り始める。

「なに」

「私との間に子供を作るつもりある？」

「将来の話だから、わからない」

「そうだよ、私さその時の為に、私のお父さんと相談してこの一連の事件を揉み消しにしようって考えたの」

「そんなことができるの？」

「大規模だけど、私の父さんって外国の同じような研究所にたくさん友達が居るの。その人に頼んですべての資料、データを無かったことにする」

「何故、そこまでしてくれるの」

「先輩のことが好きだから、後、この突然変異は・・・」

彼女は急に言葉を詰まらせる。

「人為的なものだけど、人類がこれからしていく進化を先取りしたようなものなの」

「それってどういうこと」

「私の父がその飛行機の塗装から発見した物質は突然変異を誘発させ、新たな進化を生み出す物だったのたまたまね・・・だから最初に異変を確認したミミズの子供は親とのDNAに明らかな相違点ある」

「これは、自然的でもあり、人為的でもあると」

「あなたや先輩に迷惑を掛けたのは、異変を見つけた私たち。だから責任を取る必要がある」

「僕も手伝っても良いかな？」

「私の責任なのよ」

「僕は君の彼氏だろ、それぐらいの事して当然だ」

そういつて、僕は彼女の背中を洗う。

彼女の罪を拭うように僕はタオルで強く彼女を洗う。

「先輩、ちよつと痛い」

「あつ、ごめん」

第十五話 拭う（後書き）

感想、お気に入り登録など待っています。

第十六話 弥生と狼（前書き）

第一話の方も改稿してあります。

もしよければ、そちらの方も見ていってください。

第十六話 弥生と狼

湿っぽい話の後、（麻衣と出会えた原因でもあるから一概にそうとは言えないが）

麻衣と僕は風呂を出て、寝る仕度をする。麻衣は真っ暗でないと眠れないというので、弥生さんの部屋で寝る。というわけで、弥生さんと僕はリビングで寝ることとなった。昼間の事も彼女は考慮していて、弥生さんに聞こえぬように「先輩に襲われないようにね」といい。先輩の部屋に布団を運んでいった。

そういえば、弥生さんの銃はどうなったのだろう。机に置きっぱなしになっているならば、麻衣がその銃を回収しなければならぬ。もしかすると彼女はやむおえず弥生さんの部屋にて寝ると言ったのか。

弥生さんは布団を敷き終えると、僕に喋りかける。

「寝る、それとも少し話す？」

時計を見れば、時刻はまだ、九時ちょっと過ぎだった。寝るにはまだ早い。だけど話していると麻衣に心配を掛けそうだし、弥生さんのテンションが上がって襲われる危険性がある。

「じゃあ、テレビでも見ようか」

しまった、麻衣に話しかける感じで話してしまった。

麻衣にとってみれば先輩だけど、僕からすれば同年、大丈夫だろう。

「そうね、じゃあそうしようか」

彼女は上機嫌で答えた。僕はテレビのリモコンを探して、電源をつける。

今日は日曜日だけどなにがやっているのかな。ついたテレビ画面を二人で眺める。

「洋画だね・・・」

弥生はぼろっと呟く。

「うん．．」

このシーンどつかで見たことあるような気がする。

「あっ、」

しまった、と思ってつい声が出てしまう。この映画の結末を知っているからだ。この映画は、主人公の恋人が冒頭で死に二人目の恋人を命がけで守るという物だ。僕はとんでもない外れくじを引いたかもしれない。もしも、弥生がこの映画に感化されたら．．

「どうしたの？」

「いや、これ見たことあつてさ」

「どんなストーリーなの？」

嗚呼、もうだめだ、と思い観念して全部話す。

「おもしろそうだね。観よ！」といって彼女は画面に集中する。

一時間たって、ストーリーが面白みを増してくる頃、彼女は僕の肩に寄り添ってきた。振り払う訳にもいかずそのままの姿勢で僕は映画を見続ける。全部見終わった時、僕が寄り添う彼女をちらと見ると彼女は寝息を立てて眠っていた。

これでは彼女が僕を襲うのではなく、僕が彼女を襲う立場になつてしまった。

こうしてみるとクールでチャームिंगなイメージのある弥生も可愛く思えてくる。暖かくて、鼻が高く小顔でとても整った、クールな顔立ちが、今やとても気持ち良さそうな顔をして目を閉じて頬を赤く染めている。しかもよだれまで垂らして。

だが、そんな今の彼女の状況とは裏腹に彼女の黒く、しなやかで美しい髪は昼間のような狼の本性を残しているようだった。

僕は弥生を起こさぬようそっと布団を掛け、部屋の明かりを消した。

第十六話 弥生と狼（後書き）

弥生を寝かしつけた主人公。彼女の中に居る狼は今後、二人の生存競争にどのような変化を与えるのでしょうか。役者も揃い、物語は折り返し地点を過ぎました。
これから次話投稿頑張ります。

第十七話　好きという記憶

弥生さんと二人で夜を過ごした後、僕ら二人は朝早くから家を出た。僕の服には、まだ弥生さんの気配（さつきまでそこにいたような、否、今もそこにいるような）感じが残っていた。服には暖かみさえ残っていないのに、彼女の温もりが、涎が、あの黒い髪が肩にのっかっているような気がするのだ。

僕らは家に帰って、制服に着替える。毎日の事だけど、麻衣の私生活はとても可愛い。高校一年で、ネクタイに苦戦するところとか、朝に冷えきったブレザーを着て寒がっている姿とか、それを思うと僕は堪らなくなる。

僕は彼女が制服を着替えている最中に後ろから抱き締める。冷えきった体に彼女の暖かい熱とブレザーのあのひんやりとした冷たさを同時に感じる。「先輩？」と彼女は疑問系で呟いて麻衣は制服を着替える手を止めた。「麻衣、好きだ。愛している」自然とでた言葉だけど、僕は初めて彼女に「好き」といえた、意志表示が出来た。弥生には僕が好きかどうか考えさせたのに、いつもそばにいる麻衣には今までずっとそんな簡単な事が言えなかったのだ。

「私も先輩の事好き。だからもう一度・・・」彼女はもうその先を言わなかった、否、言う必要がなかった。

僕は腕の中で麻衣を一回転させ「キス」をする。深く長く。お互いを求めあうように舌を動かす。

それから何分経っただろう、彼女を愛撫する道具が唇だけでなく、体全体になったのは。彼女の頬はいままで以上に赤く染まり、顔は骨までとろけたように快楽に満ち満ちていた。だが、彼女は絶頂に向かう体をはたと止める。僕も彼女に合わせて動きを止めた。

「先輩、私達にはまだやるべきことが残っていますよ。だから、お預け！」

「うん、お預け」

僕ら二人がやるべきこと、もうそれは決まっていた。

僕と彼女が一緒になるために、彼女の研究や他の資料を丸ごと消してしまうこと。すべてなかったことにすること。

「ひとつ、聞いてもいい？」

「なに？」

「資料やデータを消しても、すべてなかったことにしても、僕と君の出会い覚えていてくれるよね」

「うん、ここに」

彼女は自分の胸を指差してこう続けた。

「年月と共に記憶がすり減って劣化しても、私は絶対に忘れない」

「ありがとう、麻衣」

僕はそう言って彼女をひしと抱き締めた。

第十七話 好きという記憶（後書き）

今回は少し過激ですが、「やるべきこと」の前夜祭です。
これから、弥生や由香、真由や怜の思惑が複雑に交差していきます。

第十八話 澄み切った空、遠ざかる二人

遅刻しそうになった僕らは、慌てて家を出る。

「麻衣、遅刻するから早く」

「わかった」麻衣は家の鍵を慌てて閉める。慌てて閉めた後、あつ、と呟いて、「忘れ物しちゃった、先、行つてて」と言つて、もう一回家の鍵を開け始めた。「じゃあ、先に行つてるよ」と言つて僕は一人学校に向かう。

昼休み僕は、久しぶりに僕は退屈になったので（麻衣の事や自分の事で悩み、図書室とかに籠もっていた）

あの日を境に行かなくなつた、屋上に行つてみることにした。ここは校則で入つていけない事になっているが、僕はこっそりと、誰も見ていないことを確認して屋上に行き、孤独と青く澄んだ地元の空と景色を楽しむのが日課だった。僕は暗い屋上へ続く階段を足音を立てぬよう上り、重い金属製のドアを開ける。

外に出て当たりを見回すと既に先客がいた。遠くて誰だかわからないが女子ということぐらいは分かる。彼女は突っ立って景色を眺めている。僕は彼女に後ろから近づく。

「しゃがんだ方がいい」

僕は小声で彼女にアドバイスをする。

「えっ、誰ですか」

彼女は後ろを振り返る。宮木さんだ。夕暮れの帰り道、真由が僕に襲いかかつてきた時に止めてくれた子。

「久しぶり、とにかくしゃがんで。ここからだて屋上に居るってバレちゃう」

「ありがとうございます」といって彼女はしゃがむ。

そうして少し、しゃがんだ後、僕達は二人して屋上で寝ころがっ

てひなたぼっこをする。

「どうして、こんな所に？」

「何だか、教室が息苦しくなって、気付いたらここにいました」

「まさか、君が校則違反するとはね」

「私だって、不良になることあるんですよ」

宮木さんと僕は笑う。そんな話をした後、僕らは無言で冬の澄み切った青空を眺める。

「麻衣とはどうなんですか」

彼女は目を青空に向けながらそつと呟く。

「深谷さんと同じ事聞くんだね。まあ、いい感じだよ」

「そうですか」

彼女の表情が曇る。

「麻衣となにかあったの？」

「いや、先輩と麻衣、この頃仲良いから、真由と私から麻衣が遠のいているような気がして」

「そうなんだ、ごめんね」

「別に謝ることじゃないですよ、麻衣が幸せならそれでいいんです」
僕らはそれから休み時間が終わるまで空を眺め続けた。

第十八話 澄み切った空、遠ざかる二人（後書き）

久々に怜が登場しました。ですが、彼女と麻衣と主人公の間には距離がついてしまっていて、彼女は二人を羨ましがること、麻衣の幸せを願うことくらいしかできません。

第十九話 麻衣と怜の溝

宮木さんとひなたぼっこを楽しんだ日の放課後、僕は真由がいる図書館でいつもどおり仕事をしていた。でも、気になるのは宮木さんのあの言葉。

「麻衣が私や真由から遠のいているような気がして」そりゃ、どんな人でも彼女が出来れば少しは態度が変わるだろう。でも怜がいちいちそんなことを気にするだろうか。隣で手を動かしていた真由に声を掛ける。

「真由、今、麻衣は学校でどんな感じ？」

「別にいつもと変わり無いけど、それがどうしたの？」

「実は今日、宮木さんと会ったんだ。そしたら、麻衣が遠ざかって行くような気がするって」

真由は表情をすこし曇らせて、数秒間黙り込む。

「麻衣はそこまで変わっていないよ、でも二人には大きな溝がある。だから怜からしたら、遠ざかるって感じだと思う」

「溝？」

「怜も先輩のこと好きだったんだよ、でも麻衣がそれを知らずに先手を取った」

「そつ、そんな」

二人の溝はあの告白の時から広がっていたなんて、でも、それよりも麻衣の告白は僕の突然変異に押された形だった。だから怜よりも早く告白出来たのだ。そう考えるとなんて残酷な事だろう。

「でも、先輩のこと好きなら、怜も応援してくれると思うよ。私だって、先輩がここを首にならないように手伝ってるし」

「二人の溝を埋める方法はないの？」

「時間と会話が必要なんじゃない？でも、麻衣にこの事をいうと気を使うと思うから、それだけは止めた方がいいよ」

麻衣と怜の溝を埋めるにはどうしたらいいか、僕は数分間、仕

事をやめて考える。

「そうだ！私、今週誕生日なんだけど、パーティーで二人を盛り上げて 溝を埋めるのはどう？」

「いいね、麻衣に話してみることにするよ」

真由と僕は止めていた手を動かして仕事を始めた。

その夜、僕は麻衣に真由の誕生日パーティーの件を話す。麻衣は仕事が忙しいんだよ、と愚痴を言って二つ返事で承諾した。なんとかうまく行ったなと思い、ちらと、カレンダーを見る。そこには殴り書きで予定がぎっしりと詰まっていた。僕の事で忙しいのに、さらに迷惑をかけてしまったかもしれない。

「麻衣、今日の夕飯、僕が作るよ」

「いいの？じゃあ、お願いしようかな」

彼女は僕に微笑む。にしても、さっきのカレンダー、なんてスケジュールなのだろう。空いている日がほとんどない。このまま何事もないまま計画が進展するといいいけど・・・

第十九話 麻衣と怜の溝（後書き）

感想、評価して頂けるとありがたいです。

第二十話 約束

パーティーが無事終わり、麻衣と怜の溝も埋まり始めた頃、季節は秋から冬へと変わって計画は最終段階へと向かっていた。

「それで、来週は私のお父さんに来てもらって計画を練って貰う」だから麻衣は僕に事あるごとに計画について話す。

「うん、ありがとう」

だが、校内でも五本の指に入っていそうな彼女が僕のようなしけた男と付き合っていて、毎日のように話すことを許さない男も沢山いる。昨日はすこし不良っぽい先輩に目をつけられ絡まれた。

僕は麻衣としゃべったあと教室に向かう。すると急に数人の不良に一気に絡まれ、引きずらるような格好で校舎裏までつれて行かれた。

「急になんですか、こんなところに連れ込んで」

「改まってんじゃねーよ、なんででめえがあんな可愛い子と付き合ってたんだよ」

「告白されて付き合いましたが」

今回は麻衣のように言い訳できない。麻衣のこいつらの頭では雲泥の差がある。そんな事を考えているともう一人の不良がこう切り出した。

「おい、さっさとやっちまおうぜ」

僕は抵抗出来ない。後は逃げるぐらいしかないか・・・でもどうやって逃げようか？もう完全に逃げ道は塞がれている。

「ちよつといいかな」

校舎裏の出口から女子の声がする、それははつきりと聞き覚えのある声だ。でも、こんなところに居るはずが・・・

耳を疑いつつ、僕は囲まれているなかから声のするほうを向く。ちらりと黒い髪が見えた。それはきちんと一つにまとめているが狼のように力強くしなやかだ。まるで、鎖をつけられた狼のようにも見

える。あれは、弥生だ、間違いない。

「その人、私の友達なんだけど、そこで放してあげてくれないかな」
「てめえ、二股だったのか！？おい、こいつ二股してんぞ」不良はさらにいきり立つ。

「とういか、あいつ他の高校の制服だぞ！」

「今晚のおかずに・・・」

数々の情報が不良間で交錯する。だが、一つ誤認していることがある。おかずになるのは彼女じゃない。彼らの方だ。

「早くして！」

彼女は急に怒り始めた。じれったいのが苦手なのだろう。それが逆鱗に触れたのか

「おい、なめてんじゃねーよ」と一人の不良が彼女に殴りかかる。無駄なことを・・・

殴りかかる相手の拳を腕で払い、横蹴りを繰り出す。クラヴマガの技を真似ているのだろう、手品のように鮮やかだ。

「わかった？早いところ彼を放して」

不良たちはさっと僕を解放する。弥生は僕の手を握り、その場を立ち去った。

「どうしてここに？」

「約束したでしょう。好きになったら必ず言いに行くって」

「弥生さん・・・」

第二十一話 選択

「あなたのことが好き、だから付き合って」

校舎裏の出口で僕は弥生の告白に戸惑っていた。

予想は出来ていた、こんな事がいつか起こるだろうと、麻衣か弥生を選んで生存競争をすることになる、それが突然変異を起こした僕に課せられた運命なのだ。それに麻衣か弥生を選ぶと言うことは、彼女の好きという思いをぶち壊しにもする。残酷だ。だが、僕は今、彼女に本当の思いを伝えなければならない。弥生の澄んだ目に僕の顔が映っていた。

「ごめん、麻衣を裏切れないんだ」僕ははっきりと答えた。

「私のこと嫌い？」彼女はそういつて眉をしかめる。

「そんなことない！好きだけど・・だめなんだ」

そう、と呟いて彼女は僕に背を向ける。

「これが自然なのかもね。麻衣を選ぶのが、でも私はあなたの事が好き。なんとなくだけれど、そう思っていれば淘汰されないような気がするの」

彼女はそういつて、去っていった。僕は去り際の彼女に大声で叫んだ。

「ありがとう、うれしかった」と

次の日の朝のHR、先生から転校生の紹介があつた。弥生だ。昨日、学校に転校したらしい。弥生は先生の紹介を受けて教壇に立つ。「今日からこの学校に来ました九条 弥生です」

麻衣にも引けを取らない、否、麻衣の上をいく美少女の登場にクラスは沸き立った。

だが、僕は彼女の登場を喜べなかった。彼女は僕を追つてこの学校に来た。なのに僕はあんな風にハッキリと彼女を振ってしまった。こうしてみると昨日の後悔をひきずっている。こう嫌な事がある日

は決まって僕は屋上に行く。

屋上に行くとそこには以前のように先客も居らず、ただ青空が広がっていた。僕は寝転がりながらそれを只見つめる。

「こんなところに居たんだ」弥生の顔がずっと視界に飛び込む。

「弥生さん・・・」僕は驚いたもののそれ以外、何の言葉も口からでない。

それから、彼女は一人ごとのように話始めた。

「女子に囲まれてたんだけど面白くなくなってさ。やっぱり、一匹狼なんだね」

「僕がいるじゃん」

ポロツとまるでテスト用紙に涎を垂らしてしまうようにそんな台詞が口から出た。

「そうだね」彼女はこの言葉に対して何も動揺せず、にこやかに微笑んだ。微笑んだ後、視線を青空に向けた。

「空、好きなの？」と僕は聞く。

「飛行機が好きだから見てるの、地上の人間の喧騒から抜け出して自由に飛んで、それって素晴らしい？」

「そうだね」

僕も教室で起きてる喧騒を逃れるために此処に来た。だから彼女の気持ちは良くわかる。

そのまま僕はずっと無言で空を見続けた。

何気ないそこでの彼女との会話は僕の中の後悔や彼女との溝を消してくれた。まるで、それが全部あの青空に溶け込んでいくように。

第二十二話 疲労

何時もどおりバイトを終えて家に帰る。最近は受験が近づいてきたので勉強は以前に比べてとても難しくなっている。バイトと勉強の両立は難しいが、麻衣も計画の準備で忙しいらしい。だから僕が彼女を支えなければならぬと思う。

家に帰ると麻衣はぐっすりと寝ていた。食卓にはラップを掛けた食事と資料が散乱していて彼女が忙しく作業していたことが良く分かる。

僕は疲れた体で椅子に座り、食事をしながら彼女の資料を眺め回す。資料はほとんど英文だったが、一つだけ日本語になっている。

「進化の種」資料の一番上にそう書かれていた。何かのレポートだ。製作者は「楠木 柁人」麻衣の父親だろう。僕はそれを読み始める。「進化はこの地球に生命が生まれてからずっと行われているが、進化をするために重要なのが突然変異である。今年の十月に起こった米軍偵察機による健康被害は米軍偵察機に塗装されていた塗料が剥げ落ち、その物質をある特定の血液型の生物が摂取することによって発生したものである。この物質は少量でも遺伝子を破壊して不安定させ、突然変異を誘発させる。それが新たな進化の引き金となる」ここまで読んでみたが、あとは訳の分からない数式と二重らせん構造の図が続いていた。もう寝よう、今日は疲れた。麻衣の作った食事にまたラップを掛けて、部屋の電気を消した後、僕は布団に潜り込んだ。

しばらく経ってから、麻衣は僕が居ることに気がついたのか目を覚ます。

「帰ってきてたんだ、ごめんね起きて居られなくて」

「いいよ、麻衣だって忙しいんだから」

「明日は休んだら？朝から晩まで働き詰めで辛いでしょ」

「いいよ、麻衣も休めないんだから」

「私、元気にしてる先輩のほうが好きだから」

彼女の寂しそうな顔がナツメ電球に照らされている。

「わかった。でも明日は麻衣も休んで」

「うん・・布団入ってもいい？」

「いいよ」

麻衣は僕の布団に入り込む、キスや抱擁とはまたちがった温かみがある。生温いと言ってもいい。彼女の小柄で華奢な体が僕の冷え切った体を暖めた。

第二十三話 クールダウン

昨日、麻衣が言った通りに、僕は久々に休暇を取る事にした。今日は土曜日、図書館のバイトがあつたので、休みにして貰い、僕ら二人は久々に外に私用で外を出た。

「どこにいく？」

麻衣は子供のように無邪気な笑顔を見せる。

「麻衣の好きなところでいいよ」

「じゃあ、海が見えるところが良いかな」

「わかった」

海が見えるところというと、此处、東京の外れからは結構遠くなる。どこに行こうか、お金は十分にある。

「なるべくなら、人が少ないところが良いかな」

厄介なことに彼女は注文をもう一つ追加した。

「少し、遠いけど良いかな」

「いいよ」

彼女に許可を貰って、僕は俄然やる気が出てきた。地元の駅のベンチにて十分以上計画を練り、そこから電車を数本乗り継ぎ、三回バスに乗って、やっと工程の三分の二を終え、僕たちは近くにあった食堂で昼食を取ることにした。

「疲れた？」

「うん．．まさか先輩がこんなにアクティブな人だったなんて」

麻衣と僕は一緒に昼食の取る。麻衣は定食についているサラダを食べ、僕は焼き魚の骨と格闘していた。視線を彼女のほうに向けるとガラスの洒落た容器に入った青いサラダを彼女が上機嫌に食らっている、僕は絵描きではないけれど、絵になるなと思ひ焼き魚を忘れて彼女の姿に見とれてしまう。

昼食を取った後、僕らはまた電車に乗る。周りをみれば、冬の濃

い緑色をした山々が連なっていた。

僕らはあの山々を越え、「海が見える場所」に向かう。寒空のもとあの山々が僕ら二人の疲労や心の汚れを寒さと共に消しているような気がする。

第二十四話 本当の恋人（前書き）

いよいよ、物語は終盤に入っていきます。

第二十四話 本当の恋人

「着いたよ」

僕は疲れ切っていた彼女に声を掛ける。

「綺麗だね・・・」

僕らの眼前に広がっていたのは、地平線に果てしなく広がり夕日を浴びて輝く海だった。

ここは、神奈川県の中にある、とある公園。僕は何度かこの場所に行った事があり、彼女の注文に合うと思い、この場所に行く事を決めたのだ。

僕らは疲れてがたがたになった足で展望台のベンチに座り、この景色をじつと眺める。

「ねえ、どうして私を選んでくれたの？」麻衣は僕にそつと喋りかける。

「どういう意味？」

「どうして私を生存競争のパートナーに選んでくれたの？」

「景色に似合わない話だね、僕は君のことが好だからだよ。弥生は自分の遺伝子の優位性を謳って僕に近づいたけど、それだけでは、人間には不十分だと思って、僕は断った。君はあの日の後日、僕の事を好きだといって泣いてくれた。あれから結構経つけれど、忘れていないよ」

「もしも弥生があの時、好きだと言っていたら？」

「君の事を振っていた。あの時はまだこの出会いが、君にとって迷惑だと思っていたから」

また僕は、夕日を浴びて輝く海原をじつと見つめる。今度は僕が彼女に喋りかけた。

「あの夕日を浴びて輝いている海の波は今特別な存在だけど、日が沈めば周りの波と同じになる。だからもう、この話は今日、この夕日が沈むまでにしよう。日が沈んだら、本当の恋人だ」

アハハ、と彼女は声を上げて笑う。

「先輩がこんなロマンチストなんて・・・知らなかった」

「わ、笑うなよ」

と少し反論しながら麻衣の顔を見ると、彼女は大声で笑いながら涙を垂らしていた。もちろん、笑い転げている訳ではなさそうだが・・・そつと僕のハンカチを渡す。「でも、嬉しかった」と彼女は涙を拭いて笑顔を見せる。

「じゃあ、約束」

彼女は華奢な小指を僕の前に出した。

「何の約束？」

「日が沈んだら、恋人になるって約束」

僕は彼女の華奢な小指に僕の少し太い小指を重ねる。彼女は僕の小指を優しく握り指きりをした。

日は落ちていく、じりじりと僕らの思いを乗せて。

「先輩、約束守ってくださいよ」

「うん、必ず守るよ」

日が落ちると共に、気温も低下していく、いつの間にか麻衣は僕に寄り添っていた。僕も彼女の体温を感じつつ日が落ちるのを待った。麓の町の夜景がくつきりと見え始め、ついに日は沈んだ。

「麻衣、沈んだよ」

僕は彼女にそう喋り掛けたが彼女はもう僕の傍で可愛い寝息を立てて眠っていた。

「まったく」といつて僕は一つため息を着く。着いたため息は公園の電灯を受け、真っ白に輝いていた。

第二十四話 本当の恋人（後書き）

感想、アドバイスをありがとうございましたと書いていただけると有難いです。

第二十五話 始まりと終わり

麻衣を起こして僕らはロープウエーで山を下る。眼下には点々と光る麓の町の夜景が広がっていた。

「暗くなっちゃったね」麻衣は景色を見ながら呟く。

「うん、ごめんね」

「別にいいよ、楽しかったし。どこかに泊まっていこうか」

「そんなにお金持つてるの？」

「それでも、助手ですから」

ロープウエーを降りて、宿探しをする。別にどういいうところがないという訳でもないの、案外早く見つかった。

宿屋に着いて、僕らは別段何もすることが無いのでテレビを付ける。こんな山奥の田舎でも、テレビは東京と大差ない。

「夏に来れば良かったね、冬だと虫も鳴かないし、葉も落ち葉ばかりで味気ない」

「温泉が気持ちいいじゃん」

「確かに、夏に露天風呂なんかに行くと、お湯よりも地面のほうが熱かったりするしね」

彼女は笑って、「そんなことよくあるよね」と言って少し寂しい顔をする。

「夏になったらまた行けるかな」

「勿論だよ」

「なにがあっても、君が望むなら」

そういつて二人で見詰め合っていたら、急にテレビが騒がしくなった。僕はすこし顔を赤らめてテレビを見る。テレビの内容はニュース速報でロシアの大学の生物研究室で事故が起こったと伝えていた。

「始まったんだね、計画」

「うん。でも私たちにはもう関係ないから」

「でも、昨日までずっと働き詰めだったよね、大丈夫なの？ 投げ出して」

「後は、私のお父さんが日本に着てやることだから」

「そっか」

「私たちには、私たちなりの日常があるんだから。だからもう辞めるよ、この仕事。普通の学生に戻る。戻って沢山、先輩と恋愛したい、先輩の恋人でいたい」

麻衣は少し下を向いて、初めて会ったあの日のように頬を赤らめてこういった。

「だから、先輩も普通の学生でいて・・・それで、私といっぱい恋愛して」

「ありがとう」

彼女の一途な告白に僕はこの一言しか返せない。返した後、僕の頬に一筋の線が出来る。僕は泣いてしまったのだ。それと同時に僕の背負っていた十字架の重みがずっと取れたような気がしてさらに涙がこぼれた。

今までは僕の十字架で僕を好いてくれる麻衣や弥生、怜に迷惑をかけていることばかりに目が行っていたが、自分が背負っていた「普通じゃないという十字架」の重さまでは分からなかった。

だから僕は今日の夕方に彼女の幸せを願って、この話はこれっきりにしてしまおうと彼女に提案したのだ。自分の事はそっちのけで・・・

でも、僕が彼女にいった言葉をこんな形にして返してくれた。僕はその嬉しさに涙してしまった。

僕はこれから、生存競争の存在をもみ消して普通のヒトとして生活する。良きパートナーと手を取り合って。でも、もみ消したからといって生存競争がなくなるというわけではない。僕の生活には感じられなくとも自然の法則では僕は淘汰される存在だ。だが、彼女が傍に居れさえすれば、この生存競争を生き残ることが出来るって

僕は思う。

第二十六話 普通になった生活・普通の恋愛

麻衣が仕事をやめて一ヶ月が経った。計画は順調に推移している。もう既に殆どこの突然変異事件に関する資料は殆どない。それが事故だったり、紛失という形で歴史の闇に葬られつつあるのだ。この計画は麻衣の父親が立案したものだ、麻衣は以前、僕に話していたが、彼は一体どんな人物なのだろう。普通の事故ならば、研究者を裏で色々と操れば出来るだろうが、一部の事故は、軍事施設でも起こっていた。彼の交友関係はそこまで広いものなのだろうか。

麻衣は仕事をやめてから、弓道部に入った。今まではずっと帰宅部で父のサポート役だったけど今は自分のやりたいことがしたいといい、転校してきた弥生も誘って、毎日のように練習をしている。僕も今までは、バイトが終わったらすぐに家に帰っていたけど、最近は部活帰りの麻衣と弥生を迎えにいつて彼女達の近況を聞くのが僕の日課になっている。でも、本当はそんなのじゃなくて彼女が普通の女の子になって行く姿を観察したいのだ。彼氏として。

僕は今日も何時も通りに図書館での仕事を終えて、真由と別れる。

「じゃあ、先帰るね。麻衣達が待ってるから」

「うん、じゃあまた明日」

彼女は手を振って見送ってくれる。ガラス越しに正面玄関を見てみると外は真っ暗だった。僕は点々と図書館から川沿いに続く歩道の明かりを頼りに走る。

学校に着いて、弓道部に向かうと麻衣と弥生はまだ練習を続けていた。僕は外にある自動販売機でコーヒーを買い、ベンチに座って彼女が出てくるのを待った。

「また楠木さんと弥生さん待ち？」

僕の姿を見て声を掛けてくれたのは弓道部の顧問の沢沢先生だ。毎

日のように来る僕の喋り相手をしてくれる。暇な時だけだか・

彼女は生まれつきのおつちょこよいで、部活だろうと休み時間だろうといつも一つにまとめた栗色の髪を揺らして走っている。彼女が僕に話しかけられるというのなら、余程今日は彼女にとって幸運な日なのであろう。

「はい」久しぶりに彼女と喋れるということは僕も幸運なのだろう、僕は笑顔で答えた。

「凄いんだよ、弥生さん。最近入ったばかりなのに、礼儀作法とかやり方もすぐに覚えちゃって」

彼女は自慢げに話す。そりゃあそうだろう。自衛隊員の娘で、銃も分解する、世界中のあらゆる武術に詳しい弥生からすれば、弓道の作法なんてすぐに体得できるだろう。

「隣にいる僕も怖くて・・・」

アハハと溪沢先生は笑う。

「でも、ガールフレンドが傍に二人も居るなんて、君って幸せ者だね」

「えっと・・・」

彼女が不意にした発言に僕は言葉に詰まってしまう。麻衣も弥生も僕が突然変異を起こさなければ僕とは会って話をする事さえ出来なかった。それは彼女の想像した僕らの関係とはかけ離れた物だろう。だから僕は言葉に詰まってしまったのだ。

「恥ずかしいのかな？ 大丈夫だって！私もそうだったから」

私もそうだった。そうだ、僕は彼女と同じような普通の学生に戻ったんだ！だから麻衣とは普通の関係だ。弥生だって僕の事を素直に好きと言ってくれた。普通に、素直に、二人と恋愛していいんだ。そうでないと、ここまで僕を思ってくれた二人の行為を無にしてしまう。さっき、言葉が詰まったのは、魔が差してしまったんだ。もっと僕は素直にならなければ・・・

「先生。僕、もっと素直になります・・・」

「よく言った！頑張りなさいよ！私も応援するから」

先生はポンポンと僕の背中を叩いて、その場を立ち去っていった。

第二十六話 普通になった生活・普通の恋愛（後書き）

感想、アドバイスがあれば是非書いて行ってください。あとお気に入り登録や評価も待っています。

第二十七話 齒車は凜として動く

溪沢先生と別れて数分後たった後、麻衣と弥生は練習から一緒に部活から出てきた。二人は歩きながら今日の練習を振り返って談笑している。

「待つててくれたんだ」

麻衣はベンチで座って待つていた僕に笑顔でそう言つて、僕の隣に座った。彼女の吐く息は白く、見てただけで暖かみが感じられる。外は相当寒くなつていた。

「これから、何か用事とかないよね？」麻衣は僕に話しかける。

「別に、何もないけど？」

「私のお父さんを空港まで迎えに行くんだけど、来る？」

とうとう麻衣のお父さんが日本に来る、それは彼の計画が最終段階に入り、自分の研究所や資料を消すということだ。つまり、僕や弥生の突然変異はすべてなかったことになる。ということは、二人否、怜も含めたこのストーリーはすべておとぎ話になる。僕はゴクリと生唾を飲んだ。

「行くよ、忘れたいけど重要なことだから・・・」

「わかった」もう麻衣の笑顔は消えていた。

「弥生は行くの？」僕はベンチから背を向けて、少し遠くで話を聞いている弥生に声を掛けた。

彼女はクルリ回つてと僕の方を向く。

「行くよ！私のお父さんも帰ってくるから」彼女は少し大きな声で返事をする。彼女の顔は麻衣とは違い、とてもいい笑顔だった。

「弥生のお父さんって自衛官じゃなかったっけ？」今度は麻衣に質問する。

「そこを辞めて、今は海外で私のお父さんの手伝いをしているんだ」これで何となく計画の構造が分かってきた。麻衣の父が軍人である弥生の父の交流関係を使って軍事施設などの事故を引き起こす。

遠くに居た弥生がベンチに戻ってくる。

「私、嬉しい。何もかもすべて上手くいってる。これからはこの三人が出会った原因を見なくても済むんだよ。麻衣も嬉しいと思わない？」

「私も嬉しいけど・・・」そういつて麻衣は肩を落とす。

麻衣が何に悩んでいるか大体想像が付く、麻衣がこの事件を僕達に伝えて殺そうとしたからだ。

僕は隣に座っていた麻衣の肩を持って強引に引き寄せる。

「大丈夫だよ、麻衣。今に全部おとぎ話になってしまっから」

「ごめん、変なこと言って」弥生はすぐに麻衣に謝った。

「いいよ、これは私の問題だから・・・」

彼女はうつむいた顔を上げてまた笑顔になってこう続けた。

「じゃあ、私達の出会い・・・もつとロマンチックな物にして」

弥生も笑顔に戻る。

「わかった、麻衣にぴったりの話を用意してあげる」

「あんまり、恥ずかしいのはイヤだからね！」

「恥ずかしい方が麻衣にはぴったりだよ」と彼女たちの話に僕が割り込むと、麻衣はベンチを立ち僕に膨れっ面の顔を見せる。

「私、そんなに恥ずかしいことした？」

「したと思うけど」

「じゃあ、エッチな話がいい？」

「イヤ！」弥生は笑顔で麻衣をさらに弄び始める、弄ばれている麻衣の方も笑顔だ。

こうしてみると彼女達はとても可憐で美しく、そして花束のように色とりどりの個性にあふれていてその一つ一つが凛と佇んで居る。今ここに居る麻衣と弥生だけではない、怜も真由もその一部だ。

花は一見すると歯車に似ている。彼女達は無意識にその花びらを歯車のように駆動させて今を生きていて、そして僕に今という時間を与えてくれる。すべての美しい歯車の中で最初に動いたのは麻衣だった。麻衣が動いたからこそ、その歯車達は複雑に絡み始め美し

い今を生きている。

第二十七話 歯車は凍として動く（後書き）

感想、アドバイスがあれば送って貰えると助かります。

第二十八話 マッドサイエンティスト（前書き）

久しぶりの長文投稿です。

第二十八話 マッドサイエンティスト

空港に着くと既に、麻衣と弥生の父が到着していた。

「お帰りなさい、お父さん」と麻衣は直ぐに彼女の父のもとへ向かい、色々と喋り込んでいた。やはり、メールでのやり取りだけでは、伝えきれない事もあったのだろう。

弥生は僕の横で、自分の父親を眺めていた。

「君は行かないのかい？」

「うん・・・」

彼女は少し眉をしかめる。

「お父さんが帰ってくるのは嬉しいけど・・・、なんだから、邪魔になっちゃうかなって・・・」

「どうして？」

「男の人って、あんまり、女にあれこれ聞かれないじゃない？
そう思ってる・・・」

「確かに、そうだね」

「家でゆっくり話すよ・・・」彼女がそういつてしばらくのあいだ、少し沈黙が続く。

すると、遠くから麻衣の呼ぶ声が聞こえた。

「じゃあ、行ってくるね」

「うん・・・また来週」

麻衣の父は少し痩せ気味で度の厚い眼鏡を掛けたおじさんだった。研究者というよりは上役のサラリーマンという感じだ。

「初めまして、麻衣の父の 楠木 柁人です」

「宜しく願います」

「麻衣から聞いていると思うけど、僕らは自分の研究を丸ごと消してしまおうと計画し、行動してきた。でも、最後は君自身の身体や人生に関わってくる。これから、色々と難しいことを言うけど、しっかり付いてきて欲しい」

「はい」

少し不安だったが、僕はそういうしかなかった。

「流石、麻衣が惚れただけのことはあるな」

彼は少し微笑んで、こう続けた。

「自分のことで手一杯かもしれないが、麻衣の事、宜しくな」

弥生と別れた後、僕は説明を受けるため彼の研究所に行った。

「散らかっているけど勘弁してくれ・・・」

彼がそういつて入った部屋には大量の記録と本が散乱している。

彼はその本の隙間にある大きなプラスチックで出来た水槽のような物を取り出すと、

そこに彼の荷物に入っていたマウスを取り出し、水槽に入れた。

水槽には水槽だが、設備が非常に大掛かりな物で底にはいくつものスイッチとバイオハザードのシールが張られていた。

さて、と彼はいつて水槽の蓋を取り出す。

蓋もまた大掛かりなもので水密扉のようなハンドルがついている。

彼はそのハンドルを締め始める。

「密閉するの？」と麻衣が聞く。

「ああ、あれを使うからね」彼は緊張した顔でそういつと鞆から黒い粉末が入った試験管を取り出して僕に見せる。

「これが、元凶だ」

「名前はまだついてないんだよ、その物質の資料が丸ごと消えちゃったからね」

麻衣が誇らしげにそう付け加える。

「名前も無いまま消してしまうべきなんだ・・・」

彼はため息をついて試験管を装置に差し込み水槽のスイッチを入れる。

「このマウスがどうなるか良く見て・・・」

黒い粉末が水槽の上から砂時計が落ちるように出始める。

するとマウスの動きが鈍くなり、すぐに倒れた。

「この物質は劇薬だ。だが、少量なら遺伝子を傷つけ、突然変異を誘発させる。」

「私たちで言うと、ホルモンみたいな物だね」

僕は彼女たちの話を黙って聞く。なにか相槌を打とうかとも考えたが、

それじゃあ教育番組みたいで嫌だった。

すると、柁人さんから質問が飛んできた。

「マッドサイエンティスト・・・この言葉を君は聞いた事があるかな」

「はい」

「まあ、だいたい、狂気の科学者って意味だ・・・この物質はそういった類の人を生み出してしまつかもしれない、いや、もう既に生み出しているかもしれない」

そういつて彼は、埃臭い部屋の中を歩き始めた。

「ちよつと頭を捻ればどんな事にだって使える。医療、農業、兵器

でも、一番優先されて実用化されるのは兵器だ」

「核兵器」

麻衣はそつとつぶやいた。

「なんだこんなもんか？ 広島で原爆が使用される数日前の実験である科学者はそういつたんだ。だが、その二十年、三十年後はどうだ？コバルト、水爆、ミサイル、果ては、原子力で動く潜水艦が水中でミサイルを発射する。こんな将来をマンハッタン計画に関わった科学者は想像できただろうか？」

彼の足は止まる。

「私はマンハッタン計画や原子力を考案した科学者はマッドサイエンティストだと思うよ・・・広島・長崎に原爆を落とし、ソ連、アメリカ、いや、世界市民に核への恐怖を与えた彼らは・・・私はそんな科学者にはなりたくないし、世界各国の科学者にはそうなって欲しくない願っている」

そういつて、彼は少し微笑んだ。

「この話をしたのは九条君以来だったから、ついつい熱が入ってし

まったよ・・・もう遅いから今日はこれで終わりにしよう
「

第二十八話 マッドサイエンティスト（後書き）

感想などがありましたらどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5198p/>

僕と彼女の生存競争

2011年5月4日20時11分発行